



## 稲見昌彦

東京大学先端科学技術研究センター / JST ERATO

# ACM シーグラフ運営委員 体験記

本リレーコラム第1回の著者として指名されたわけであるが、まずは会員にとっても身近な学会運営にかかわる記事ということで、数年前の話であるが巨大国際会議 ACM SIGGRAPH (以下シーグラフ) の運営委員体験談を記したい。

シーグラフは1974年から開催されるコンピュータグラフィクスとインタラクティブ技術に関する国際会議かつ祭典であり、最盛時の1997年には4万8千人を超える参加者を記録し、現在は当時の勢いはないものの1万5千人前後の参加者で推移しているACMの中で最大規模の国際会議の1つである。発表カテゴリもフルペーパー、コース、ポスターなどの定番から、アートギャラリー、VRビレッジ、コンピュータアニメーションフェスティバル、企業展示などアートやVRコンテンツの発表、企業展示など多岐にわたり、正に学術と産業が密に連携した祭典としての側面も有している。また、著者、発表者はコントリビュータとして参加費が無料となる点もユニークである。

筆者は博士課程2年であった1997年より査読付き実演展示発表である「エマージングテクノロジーズ」にてほぼ毎年参加・発表しており、発表者としての勝手はよく分かっていたが、運営に関してはどのようにチェアが選ばれるかも含めて知る機会がなかった。

筆者が実際に運営委員を務める2年前の2014年8月シーグラフの会期中、2016年の運営委員長に内定していたモナ・カスラ (Mona Kasra) から運営委員候補として推薦があり、面談を行いたいとの連絡が入った。モナは当時博士修了目前のテキサス大の学生で、気鋭の若手女性研究者であった。その後、2014年11月にモナより日本人初のエマージングテクノロジーズ担当運営委員に内定したとの連絡がきた。シーグラフの運営委員はシャドーイングと称し、前任委員と同じ会議に出席し、メールも目を通すことで円滑に引継ぎを行っている。また、事務、設営、広報、スポンサ対応、情報システムなどは過去の経緯やトラブル対策などを熟知した運営業者が経年的に行っている。19名の運営委員と22名の運営業者との関係は官庁における大臣と官僚の関係をより対

等にしたものに近いかもしれない。

運営にあたって、まず発足会冒頭で各担当の顔写真入り自己紹介スライドが共有され、顔と名前を頭に叩き込む。さらに各種アイスブレイキングセッションで打ち解けながら「チーム・モナ」を固め、各セッションの構想にも全員がコメントしつつ練り上げる (図-1)。その後は表-1に示すような会議を、2015年2月よりシカゴや開催予定地のアナハイムで合宿形式にて行う。それ以外にさらに年数回オンラインのミーティングが入る。

また、モナと1対1で行う面談や運営業者が担当ごとにブースを構え、そこを運営委員が順に回りながら詳細を詰める運営フェアなどがあり、英語が非ネイティブな筆者が全体会議でなかなか良いタイミングで議論できない点をうまく調整することができ、大いに助けられた。中には懇親会メニューの試食および選定といった役得業務もあったが、メディアからのインタビューを想定したレクチャーなど会議を通して細かなところまで皆で丁寧に行う姿勢に、国際会議の運営をそれな



図-1 「チーム・モナ」集合写真  
筆者は3列目右から3人目、モナは左端

表-1 シーグラフ運営ミーティングリスト

| 会議種別  | 2015年      | 2016年      |
|-------|------------|------------|
| 発足会   | 2月27日～3月1日 | -          |
| 審査委員会 | 4月8～11日    | 3月30日～4月2日 |
| 運営会議1 | 4月24～26日   | 4月15～17日   |
| 運営会議2 | 7月19～21日   | 6月10～12日   |
| 大会会期  | 8月9～13日    | 7月24～28日   |
| 反省会   | -          | 9月16～18日   |
| 企画会議  | 11月6～8日    | -          |

りに経験してきた筆者も、さすがはシーグラフと見習うべきところが多々あった。

2年にわたる準備期間を終え、アナハイムで開催された大会は、いくつかトラブルに見舞われたものの、「チーム・モナ」で互いにフォローしつつ盛況のうちに終えることができた。大会後の反省会で唯一のアジア圏からの運営委員であった筆者に「最もマイルが獲得できたで賞」(図-2)が授与された。

今回運営委員を務め感銘を受けた点が、ほかのメンバの過剰とも思えるほどのホスピタリティである。その理

由を探ってみると、どうやら筆者以外のほとんどの運営委員がシーグラフの学生ボランティア出身であった。日本の学会運営において、学生は教員の指示で集められるアルバイトがほとんどであり、運営にかかわることに価値を感じる学生は少ない。シーグラフをはじめとする大規模な国際会議では、学生ボランティアは多数の応募者から厳選された精鋭であり、夢や悩みを共有できる仲間であり、そのコミュニティは社会人となった後も、求職や仕事上の繋がりなど、有益な財産となっているようである。そして国際会議運営は学術系ボランティアにとっての本業とは別の、価値あるキャリアパスとなっている。

筆者自身、国際会議に貢献するという事は、魅力的な研究を数多く発表することだと長らく信じていた。しかし、今回の経験で改めて学んだことは、「素晴らしい研究成果を共有する価値のある場」を運営メンバとして活性化することの重要さであった。日本人研究者がいくら論文を多数発表しても、日本人の貢献が少ないと言われる続けていた理由がようやく腑に落ちた。

学生読者の方はぜひ学会発表や著名研究所でのインターンだけでなく、著名国際会議の学生ボランティアにもチャレンジしてほしい。それは価値のある経験となる。

さて、次のリレーコラムは学術的な話題から少し離れ、連載漫画「IT 日和」の山本ユウカ氏にバトンを渡し、「会誌編集委員会の風景」を描いていただきたい。



図-2 大会終了後の反省会で渡された「最もマイルが獲得できたで賞」

デジタルプラクティスが HTML ページでご覧いただけるようになりました

デジタルプラクティスはより多くの方々にご覧になっていただけるよう 31 号から HTML ページで公開を始めました。PC やスマートフォン、タブレットに対応したレスポンシブサイトですので、お気軽にアクセスしてみてください。



無料公開

<https://www.ipsj.or.jp/dp/contents/publication/index.html>

